

リカード貿易理論の「原型理解」について

On Ricardo's International Trade Theory *As It Was*

田 淵 太 一

TABUCHI, Taichi

Abstract

This paper will examine Kenzo YUKIZAWA's understanding of Ricardo's theory of comparative costs *as it was* and the recent interpretation of it by R. Ruffin, both of which show that the four numbers in Ricardo's example of comparative advantage represent not unit labour coefficients but the labour needed to produce the amounts of wine and cloth actually traded. Then I will argue that, based on Ruffin's discovery of how and when Ricardo established the value theory of labour and the law of comparative advantage, Ricardo's international trade theory must be grasped as a whole at once, containing as essential part not only the principle of the comparative costs but also the theory of profits and the "specie flow mechanism".

Keywords: Ricardo, international trade theory, comparative advantage, Kenzo YUKIZAWA, Ruffin.

「[比較生産費の] 原理をはじめて正当に強調し、適切な提示方法 (an appropriate setting) をはじめて提起し、経済学者の全面的な受容を獲得したことで、榮譽を受ける資格がリカードにあることは疑う余地がない」(Viner 1937, p.442, 強調引用者)。

「イングランドは、100人のイングランド人によって生産されるクロスを差し出して、80人のポルトガル人によって生産されるワインと交換する。この量のワインは、120人のイングランド人によってようやく生産できたであろうから、イングランドは20人のイングランド人の労働を利得する。ポルトガルは、80人のポルトガル人によ

て生産されるワインを差し出して100人のイングランド人によって生産されるクロスと交換する。このクロスを生産するには90人のポルトガル人の労働が必要であったらうから、それゆえにポルトガルは10人のポルトガル人の労働を利得するのである」(Sraffa 1930, p.541)。

「リカードの設例から導かれる**思考の節約**と**成果の豊かさ**は真に驚嘆すべきものである」(Maneschi 2003, p.6, 強調引用者)。

I はじめに

かつて、拙稿『「特殊ケース」としてのリカード・モデル』(田淵2001)において、テキストブックにおけるリカード貿易理論の標準的解釈は、貨幣的自動調整メカニズムの作動を暗黙の前提にした「特殊ケース」であると論じた。その際、テキストブックの「リカード・モデル」とオリジナルのリカード貿易理論の差異については深く追究しなかった。本稿ではその問題を正面から取りあげ、はたして前稿で行なった批判がオリジナルのリカードまで射程に収められるのかどうかという点も含め、リカード貿易理論の全体像を把握することを目的とする。

なお、本稿の内容は、第62回日本国際経済学会・全国大会(2003年10月4・5日、於・京都大学)における馬場宏二教授(大東文化大学)の御報告「比較生産費説の両端」にたいして、筆者が予定討論者に指名されたことに触発されて発想に至ったものである。先端にヘンリー・マーチン、中央にリカード、後端にマルクスを配して「比較生産費説」の理論史を展開される馬場教授の問題圏は、ヘンリー・マーチンの再発見をはじめとして、まことに懐が深くまた実り多いものである(馬場2003a, bを参照)。馬場教授にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げたい。

Ⅱ リカード「比較生産費説」の「変型理解」と「原型理解」

「比較生産費説」原文

リカードが『経済学および課税の原理』（以下、『原理』と略称）第7章「外国貿易について」において、いわゆる「比較生産費説」を提示したとされる部分は、狭義には、以下の引用部分であり、P・サムエルソンが述べた「4つの魔法の数字」（Samuelson 1969, p.678, 邦訳349ページ）を中心とする5パラグラフと1つの長い注からなる¹⁾。便宜のため、原文および訳文を掲げ、段落に番号を付す。

原文 (Ricardo I, pp. 134-6, 強調引用者)²⁾

[1] If Portugal had no commercial connexion with other countries, instead of employing a great part of her capital and industry in the production of wines, with which she purchases for her own use the cloth and hardware of other countries, she would be obliged to devote a part of that capital to the manufacture of those commodities, which she would thus obtain probably inferior in quality as well as quantity.

[2] The quantity of wine which she shall give in exchange for the cloth of England, is not determined by the respective quantities of labour devoted to the production of each, as it would be, if both commodities were manufactured in England, or both in Portugal.

[3] England may be so circumstanced, that to produce the cloth may require the labour of 100 men for one year; and if she attempted to make the wine, it might require the labour of 120 men for the same time. England would therefore find it her interest to import wine, and to purchase it by the exportation of cloth.

[4] To produce the wine in Portugal, might require only the labour of 80 men for one year, and to produce the cloth in the same country, might require the labour of 90 men

1) 広義には、p.133下から8行目“The same rule which...”で始まるパラグラフから、p. 137の3行目までの部分であり、10パラグラフと1つの長い注を含む。下記の引用部分以前に3パラグラフ、以後に2パラグラフが加わる。

2) 『リカード全集』からの引用は巻数および原文ページ数のみを示す。

for the same time. It would **therefore** be advantageous for her to export wine in exchange for cloth. This exchange might even take place, notwithstanding that the commodity imported by Portugal could be produced there with less labour than in England. Though she could make the cloth with the labour of 90 men, she would import it from a country where it required the labour of 100 men to produce it, because it would be advantageous to her rather to employ her capital in the production of wine, for which she would obtain more cloth from England, than she could produce by diverting a portion of her capital from the cultivation of vines to the manufacture of cloth.

[5] Thus England would give the produce of the labour of 100 men, for the produce of the labour of 80. Such an exchange could not take place between the individuals of the same country. The labour of 100 Englishmen cannot be given for that of 80 Englishmen, but the produce of the labour of 100 Englishmen may be given for the produce of the labour of 80 Portuguese, 60 Russians, or 120 East Indians. The difference in this respect, between a single country and many, is easily accounted for, by considering the difficulty with which capital moves from one country to another, to seek a more profitable employment, and the activity with which it invariably passes from one province to another in the same country.*

[6] *It will appear then, that a country possessing very considerable advantages in machinery and skill, and which may therefore be enabled to manufacture commodities with much less labour than her neighbours, may, in return for such commodities, import a portion of the corn required for its consumption, even if its land were more fertile, and corn could be grown with less labour than in the country from which it was imported. Two men can both make shoes and hats, and one is superior to the other in both employments; but in making hats, he can only exceed his competitor by one-fifth or 20 per cent; and in making shoes he can excel him by one-third or 33 per cent.;—will it not be for the interest of both, that the superior man should employ himself exclusively in making shoes, and the inferior man in making hats ?

訳文³⁾

[1] ポルトガルは現実にはワイン生産に自国の資本と労働の大きな割合を充てており、そのワインでもって外国産のクロスや金物類を購入しているのであるが、仮にポルトガルが諸外国と通商関係をもたないとすれば、この資本の一部をこれら諸商品の製造に充てざるをえず、こうして得られる諸商品はおそらく数量が少ないばかりでなく品質も劣るであろう。

[2] ポルトガルがイングランドのクロスと交換に与えるワインの数量は、各々の生産に充てられる労働量によって決定されるものではない。もし両商品がともにイングランドまたはポルトガルで製造されたなら、それぞれの労働量によって決定されるのであるが。

[3] イングランドが、クロスを生産するのに年間100人の労働を要し、もしワインを生産しようと企てれば年間120人の労働を要する、という事情におかれているものとしよう。それゆえにイングランドはワインを輸入し、それをクロスの輸出で購入することが自国の利益になると考えるであろう。

[4] ポルトガルでワインを生産するには年間80人の労働しか要せず、同国でクロスを生産するには年間90人の労働を要するとしよう。それゆえに、ポルトガルはクロスと交換にワインを輸出することが有利であろう。この交換は、たとえポルトガルが輸入するクロスが同国でイングランドよりも少ない労働で生産できるとしてもなお、行なわれるであろう。ポルトガルが90人の労働でクロスをつくることができても、それを生産するのに100人の労働を要する国から、それを輸入するであろう。なぜならば、ポルトガルにとってはむしろワインの生産に自国資本を使う方が有利だからであり、

3) 『リカード全集』の訳文は、断りなく適宜改める。なお、本稿で「イングランド」という表記をとくに採用するのは次の含意による。

「19世紀の終わりの四半世紀に支配的であった正統派の経済理論が意図していたことは明確そのものであった。自由放任主義、自由貿易、金本位制を支持し、競争的な私的企業による利潤追求が一般的に好ましい効果をもっているという考え方を支持したのである。この考え方は、拡大、繁栄しつつあった資本主義世界における権力者たちの歓迎するところであった。とくに、イングランドの権力者たちにとっては都合のよいものであった。……このことは、グレート・ブリテンあるいは連合王国についてよりもイングランドにかんして妥当するものであった」(Robinson 1971, 邦訳10ページ)。

ワインと引き換えにイングランドからクロスを入手すれば、自国資本の一部をブドウの栽培からクロス製造に転用して生産可能になるクロスよりも、より多くクロスを手に入れるであろう。

[5] こうしてイングランドは、80人の労働の生産物と交換に、100人の労働の生産物を与えるであろう。このような交換は、同一国内の個人間では行なわれえないであろう。100人のイングランド人の労働が80人のイングランド人の労働と交換に与えられることはありえないが、100人のイングランド人の労働の生産物が、80人のポルトガル人、60人のロシア人、あるいは120人の東インド人の労働の生産物と交換に与えられることはありうる。単一国内と多数国間のこの相違は、次の事情を考察することで容易に説明できる。すなわち、資本がより高い利潤をもたらす用途を求めてある国から別の国へと移動するのは困難だが、同一国内のある地方から別の地方へと資本がつねに移動することは活発に行なわれているのである。*

[6] *こうしてみると、ある国が、機械と熟練について非常に優れ、したがって隣国よりもはるかに少ない労働で諸商品を製造しうるとしても、その国が、この諸商品と交換に、自国の消費に要する穀物の一部を輸入することがありうる、ということは明らかであろう。たとえその国のほうが穀物の輸入先となる国よりも、土地が肥沃で、少ない労働で穀物を栽培できるとしても、そうなのである。2人の人間がいて、ともに靴も帽子も作れる。一方が両方の仕事で他方に優るとする。ただし一方の人が帽子製造で競争者に優る度合いがわずかに1/5すなわち20パーセントであるのにたいし、靴製造の方では1/3すなわち33パーセント優っているとしよう。優れた方は靴製造に専従し、劣る方は帽子製造に専従するのが、両者の利益ではないか？

通常解釈

現在、事実上すべてのテキストブックが採用する「リカード・モデル」の標準的解釈とは、次のようなものである（田淵2001も参照せよ）。

すなわち、「4つの魔法の数字」は、2国2財モデルにおいて、各財1単位の生産に必要な労働量（単位労働係数）を示すと解釈される。両国それぞれにおいて、単位労働係数の比が、アウタルキー価格（貿易以前の国内相対

価格ないし機会費用)を表す。労働を唯一の生産要素とする1要素経済、および固定係数の仮定により、生産可能性フロンティアは線型となり、貿易開始後、両国ともに完全特化という結果が生じる(片方の国がたまたま「大国」であった場合を除く。その場合、「大国」は不完全特化となる)。交易条件は相対供給と相対需要により両国のアウトルキー価格の間で決定される。「大国」のケース、および交易条件がたまたま片方の国のアウトルキー価格に等しくなる場合を除いて、両国に必ず貿易利益が発生する。

テキストブックの標準的解釈に立脚する現代の論者は、そこから逆にリカードの論理の不十分さを批判する。たとえば、貿易理論史にかんする有力なサーヴェイを行なったJ・チップマンによれば、上記引用部分のパラグラフ [3] は、「不合理な推論 *non sequitur* である。なぜなら、その箇所までではポルトガルについて何も述べられていないからである」。続くパラグラフ [4] の最初の2文も、パラグラフ [3] と「同時発生するものと読まれたい限りは同様に不満足なものである。……この法則にかんするリカード自身の論述はまったくもって舌足らずであり、彼がそれを本当に理解していたか疑わしくなるほどである」(Chipman 1965, pp.479-80)。

現在においてもなお、多くの論者がチップマンによる批判の影響下にあり、リカードが「論理的に誤っている」あるいは少なくとも「不注意であった」と指摘するのが通例となっている(たとえば、Maneschi 1998, p.53を参照。これはManeschi 2003で撤回された)。

行澤健三の「原型理解」

こうした標準的解釈をJ・S・ミル以後行われた「変型理解」であるとして批判し、リカード自身の論理にしたがって解釈すべきであるとしたのが、行澤(1974, 1978)の提示した「原型理解」である。

行澤(1978, 206-7ページ)によれば、「変型理解」の特徴は以下の5点である。

①原文 [3] [4] [5] を一括引用して、ワンセットの思考表現として提示する。

②そこから逆に、貿易パターンと貿易利益の決定にかんしてリカードの叙述は不十分であると指摘し、補足説明を試みる。

③「一括引用」に対応して、4つの数字を各国で各商品1単位を生産するのに要する労働量として図表化する。

④その図表において、「貿易以前」の両国の生産費ないし交換比率を示す。

⑤リカードには交易条件決定理論が欠如しているとし、決定要因について説明がないまま、原文 [5] 第1文においてクロス1単位対ワイン1単位の交易条件を設定している、とする。

要するに、「4つの魔法の数字」を単位労働係数として一括して提示する解釈を「変型理解」としているのである⁴⁾。

リカードの論理に忠実な理解を行なうために、行澤がまず着目した解釈上のポイントは、原文 [3] の“therefore (それゆえに)”である。イングランドの貿易パターンと貿易利益を判断する根拠は、“therefore (それゆえに)”以前に示されているはずである。そこから行澤は、リカードが現実の世界市場で成立している交易条件(特定の量のクロスと特定の量のワインの交換比率)を前提としていることを解き明かす。それぞれの商品の特定量に要する生産費から貿易の方向と利益が確定されるとするのである。

その解釈上の根拠は、原文 [2] [3] の定冠詞に求められる⁵⁾。

[2] *The quantity of wine which she shall give ...*

[3] *that to produce the cloth may require the labour of 100 men for one year ; and if she attempted to make the wine, ...*

「この定冠詞を意識的に訳せば『イギリスの特定量の服地と引き換えにポ

4) 4つの数字を単位労働係数として一括して「図表」にする提示方法はジェームズ・ミルに始まり、J・S・ミルによって普及された (James Mill 1844, J.S.Mill 1844, 1848)。この思考法は20世紀に入り通例となった (たとえば, Viner 1937, p.445)。この「変型」プロセスについては続稿で改めて論じる。

5) なお、本山 (1982, 第9章, および1984) は、助動詞の用法 (イングランドのクロス以外の3財について仮定法過去が用いられていること) に着目し、リカード貿易理論のより深い含意を摘出している。

ルトガルが与えるぶどう酒の特定の量は…』となる。……続いて原文 [3] では、……『服地』および『ブドウ酒』に付けられた定冠詞を意識して訳し直すと、『イギリスはその特定量（a ヤール）の服地を生産するのに1年間100人の労働を要し、またもしもその量（b ガロン）のブドウ酒を醸造しようと試みるなら同一時間に120人の労働を要するであろう』ということになる。したがって、逆にいうとイギリスで年間100人の労働で造られる服地の特定量および120人の労働で造りうるブドウ酒の特定量が、リカードの設例における服地およびブドウ酒のそれぞれ1単位であり、現実の世界市場で服地とブドウ酒はそのような単位で測られた1対1で換えられているのである」(行澤1978, 208ページ)⁶⁾⁷⁾。

結局、行澤が提示した「原型理解」は、以下の特徴をもつ(森田1977, 308ページ)。

①リカードは、「貿易以前」を想定せず、現実にイングランドのクロスとポルトガルのワインが交易されているという事実から出発する。

②現実に成立している交易条件（クロスとワインの交換比率）を所与とす

6) 行澤 (1974, 130ページ) によれば、「比較生産費説」の「原型理解」について行澤以前に明白な立言をした唯一の例は木下悦二 (1963) である。

「ところで、リカードの比較生産費説にあたっては、イギリスのラシャとポルトガルのブドウ酒が一定の量的割合で交換されることから出発している。1703年のメシュエン条約によってもわかるように、これはイギリスとポルトガルの間の代表的な伝統的貿易商品であったから、この設例にとりあげたのであって、すでに一定の量的比率での両商品の交換を前提した上で、両商品のそれぞれの国での投下労働量を比較しているのである。だから議論が、交換価値が直接投下労働量によって決定されるものではないというところで打ち切られても、リカードにとってはそれで十分であったといえる。けれども両国でのラシャとブドウ酒の交換比率が、それぞれの国における生産に要した労働量にしたがって決定されていることから出発するならば、イギリスとポルトガルの間の両商品の交換比率がどうしてリカードのみるような比率——1対1とみてよいのだが——に落ちつくかの説明が必要となろう。しかしその点についてリカードには彼の見解をうかがうに足る叙述は見当たらない」(木下1963, 109ページ)。

なお、この引用文で触れられているイングランドとポルトガルの貿易関係の実態がいかなるものであったかについて、続稿でとりあげる予定である。

る。現に等価で交換されている一定量のクロスおよび一定量のワインをそれぞれの計算単位とし、

③それぞれの国について、輸入品の入手費用（輸入品の対価となっている輸出品の生産費）と、それを自国で生産したとすれば要するであろう費用とを比較して、

④前者が後者よりも小さいがゆえに貿易が行われ、労働の節約が実現されていることを説明しているのである。

行澤によれば、「原型理解」によって浮き彫りになったリカード自身による貿易利益の推論形式（③→④）は、結局 J・ヴァイナーが命名した貿易利益にかんする「18世紀ルール」⁸⁾の域を出ないものであると判明する（行澤 1978, 208-9ページ）。この点については後述する。

行澤の構想

行澤は自ら明らかにしたりカード「比較生産費説」の「原型理解」を、「各国にとってはあらかじめ世界市場での交易条件は外生的に与えられ、それにもとづいて、個別の利益を追求している事態を的確に理論化している」と総括したうえで、残された課題を以下のように構想している（行澤 1974, 132-3ページ）。すなわち、「可変生産費の状態を原型的推論形式にもちこみ」⁹⁾、貿易が行われるにつれ、「収穫逓増、逓減、不変というばあいに応じてつぎの時点で交易条件が与えられ、そのうえであらためて原型推論がなされつづける」という構想である。「以上の原型推論との関連で、リカードウ貿易論がどこまで読み直せるか」を追究する時間は、1979年に世を去った行

7) 行澤は、現実に交易されるクロスとワインの特定量を、「a ヤール」対「b ガロン」と適切に表現しつつ、直後で「1 対 1」と置き換えている。たしかに両表現は論理的には等価だが、しかし「4つの数字」を単位労働係数から明確に区別するためには、「a ヤール」対「b ガロン」という表現のほうが優れている。「1 対 1」と表現すると、4つの数値自体が単位労働係数と区別がつかず、無用な錯覚を招く危険がゼロではないからである（たとえば、Viner 1937, pp.444-8）。「a ヤール」対「b ガロン」という表現からあえて単位労働係数を算出するとすれば、1 ヤールのクロス生産に必要な労働量＝「 $100/a$ 人」、1 ガロンのワイン生産に必要な労働量＝「 $80/b$ 人」というように表現され、「4つの数字」と単位労働係数は明確に区別される。

澤には残されていなかった。実際、行澤の学問的営為の過半は、「定義にこだわりすぎる国際価値論の論争の水準とは図抜けて高い水準で国際価値論の仮説を具体化への方向に推し進めた唯一の業績」（本山1982, 170ページ）と評された、日米労働生産性の国際比較にかんする膨大な研究に最期まで費やされることになるのである（その成果の一部は行澤1976に収められている）。

Ⅲ リカード貿易理論の全体像

「Sraffa=Ruffin解釈」

近年、海外で、行澤とは独立に、「原型理解」にほぼ重なるリカード解釈が登場した（Ruffin 2002）。ラフィンによれば、リカードの「4つの数字」

- 8) 次の一文がヴァイナーによる「18世紀ルール」の説明である。「諸商品が自国内で生産するより少ない実質費用で、輸出品と交換に入手されうる場合には、それらを海外から輸入する」（Viner 1937, p.440）。なお、ヴァイナーはこの箇所では「18世紀ルール」をA・スミスに先立って定式化したものとして、1701年に匿名で発行されたパンフレット『東インド貿易の諸考察』を特記している。このパンフレットの筆者が、このたび馬場教授によって再発見されたヘンリー・マーチン（Henry Martyn）である。以下にマーチンによる貿易利益の論証（「18世紀ルール」の典型例）を馬場教授の訳文により引用しよう。「イギリスで物を作るのに、インドから調達する際に必要な人手以上の人手を雇うことは、益を得るために雇える多くの人手を、益を得られないのに雇うことである。もしイギリスでは9人で小麦3ブッシェル以上作れないが9人の労働でどこか外国から9ブッシェル入手できるならば、9人を国内農業に雇っておくことは、彼らに3人分の仕事しかさせないことであり、6人を彼らなしにやれた仕事、6ブッシェルの小麦をイギリスにもたらす益を生まない仕事に就かせることになる。これはイギリスにとって小麦6ブッシェルのしたがって同じ価値の損失である。それゆえ、イギリスで9人の労働で10シリングの価値の製品を作りうるとし、同じ労働で外国から3倍の価値の製品を入手し得るとしたら、この人達をイギリスの製造業で雇うことは、外国から2倍の価値の製品を入手するために雇うことができたかもしれない、9人中6人を益なしに雇ったことになり、それは明らかに国家にとって同額の損失なのである」（[Martyn] 1701, pp.34-5 [582-3], 馬場 2003a, 293-4ページ）。
- 9) 原文 [6] の「自国の消費に要する穀物の一部分 a portion of the corn required for its consumptionを輸入することがある」という記述から、リカードが完全特化でなく不完全特化を想定していたことは明らかである。この事実は、可変生産費を導入し、ワイン部門（穀物部門）で収穫逓減が作用すると想定する必要があることを示している。その場合、生産可能性フロンティアは、テキストブックが想定する直線ではなく、原点にたいして凹型となる。

がイングランドとポルトガルのクロス、ワイン生産における単位労働係数を示すとする伝統的解釈はミル父子以来の誤解であり、そうではなく、この「4つの数字」は現実の貿易で取引される特定の数量のワインとクロスを生産に必要な労働を示すとされる。さらに、リカードの「4つの数字」によって、2つの数字を残りの2つから差し引くだけで両国の貿易利益が得られるということを示したスラッフアの功績が復活される（本稿冒頭の引用文を見よ）¹⁰⁾。

従来、ヴァイナー (Viner 1937)、チップマン (Chipman 1965)、スエット (Thweatt 1976) と同様の「変型理解」を提示していたマネッシ (Maneschi 1998) は、自説を撤回してラフィンを支持し、これを「Sraffa = Ruffin 解釈」と命名した (Maneschi 2003, p.19)。

ラフィンによる新解釈の要点は以下の通りである。

「Xを『ワインの量』とし、これがY単位のクロスと交易されるところ。イングランドがX単位のワインを生産するために年に120人を必要とし、Y単位のクロスを生産するために100人を必要とするとするれば、『それゆえに、イングランドはワインを輸入しクロス輸出によって購入することが利益になると考えるだろう』。リカードはポルトガルについて続けて、ワインを生産するのに80人、クロスを生産するのに90人必要だとする。明らかにポルトガルは、X単位のワインを生産しこれをイングランドのY単位のクロスと交易すれば、10人を節約することになるであろう」 (Ruffin 2002, pp.741-2)。

さらにラフィンは、リカードによる比較優位の提示方法が、国の数、財の数がいかなるものであっても適用可能である、とする。

「リカードの証明は優雅で単純で優れている。……この論理的構造は、いかなる数の財あるいは国も用いることができるのである。たとえば、クロス、

10) 行澤 (1978) も Sraffa (1930) を取り上げて検討しているのだが、「4つの数字の一括引用」および「図表化」という自ら設けた「変型理解」の条件に惑わされたためか、スラッフアが「4つの数字」を単位労働係数から明確に区別し、しかも貿易利益にかんするリカードの簡明な提示方法を端的に指摘している点を見逃している。

穀物、ワインが世界市場でX : Y : Zの比率で交易されているとしよう。すると、ありうべき多くの国のうちのどの国も、X単位のクロス、Y単位の穀物、Z単位のワインのうち、生産に要する労働量が最小の財に資源を投入するだろう」(同上, p.742)。

冒頭に取りあげたとおり、マネッシは「リカードの設例から導かれる思考の節約と成果の豊かさは真に驚嘆すべきものである」(Maneschi 2003, p.6, 強調引用者)と結論づけている¹¹⁾。

ラフィンによる新解釈の核心

しかしながら、ラフィンの問題提起が以上の内容にとどまるならば、行澤による「原型理解」をすでに知っているわれわれにとって、真に革新的な解釈とは言えないであろう。実のところ、ラフィンによる新解釈の核心は、リカードがいつどのようにして「比較優位の原理」を発見したかを明らかにした点に存するのである。ラフィンの主張の眼目は、『リカード全集』の編者スラッファによる第I巻編者序文および編者注に重大な誤りがある、という点にある¹²⁾。以下、ラフィンによるリカードの書簡の分析を紹介しよう(Ruffin 2002, pp.735-8)。

労働価値説の採用 (1816年3月頃)

従来、1815年の『穀物の低価格が資本の利潤に及ぼす影響についての試論』(以下、『利潤論』と略記)において、リカードが「比較優位」について触れていないことは、一部の研究者を困惑させてきた(たとえば, Chipman 1965)。リカードが「比較優位の原理」を発見したのは明らかに、1816年3月から10月の間のいずれかの時点である。

まず1816年3月という日時についてはどうだろうか。その背景には、リカードが「比較優位の原理」を発見するに先立って労働価値説を採用した、という事情がある。

S・ホランダーは1815年の時点ではリカードがまだ厳密な労働価値説を採

11) したがって、同じく冒頭に引用したヴァイナーからの引用文は、ヴァイナー自身の無理解にもかかわらず、字句のうえでは正しいのである。

用していなかったことを明らかにしている (Hollander 1979, p.185, 邦訳248-9ページ)。編者スラッファはこう述べている。「1815年10月および11月の手紙は、企てられた著作の主な項目 (地代, 利潤, 賃金) を提示しているが, その中に価値への言及がないのは注目に値する」(編者序文, Ricardo, I, p.x iv)。実際, リカードは1816年2月7日付のマルサス宛書簡ではじめて労働価値説に言及しており, そこにはこう記されている。「相対価値または交換価値の根源および法則にたいして明瞭な洞察を与える仕方を妨げている障害を私が克服することができましたなら, 戦いはなかば私の勝利となるでしょうが」(マルサス宛1816年2月7日付, Ricardo, VII, p.20)。

ラフィンによれば (Ruffin 2002, p.736), リカードが労働価値説を確立したのは1816年3月頃である。1816年3月9日頃, マルサスがリカードを数日間訪問した。マルサスから次の書簡が来るのは1816年4月28日なのであるが, そこにこうある。「あらゆる価格を労働によって決定し, また需要と供給の大原理の作用から資本を除外するという問題については, あなたが正道を踏

-
- 12) ラフィンは『リカード全集』の第I巻編者序文および編者注がスラッファの手になるものであることを疑っていないようである。しかし, P・サムエルソンは, 第I巻編者序文の筆者がスラッファでなくM・ドップであることを強調する。「わたくしは, スラッファ版のリカード『原理』への編者序文を読んだときに, ほとんど自分の目を信じるができなかった。あの洗練されたピエロ・スラッファが, 外延的限界の使用にかんするこんな明らかな間違いにだまされるなどということが, ありうるのだろうか。わたくしの混乱は, 『ケンブリッジ・ジャーナル・オブ・エコノミクス』にのった故モーリス・ドップの自伝的な一文を最近読んでいく過程で, 減退していった。そのなかでわたくしは, この序文を書いたのはスラッファではなくてドップだということを知ったのだ!」(Samuelson 1969が収録された日本語版『サムエルソン経済学大系第9巻』の序文iiiページ)。

Dobb (1978) には, サムエルソンが主張するほど明確ではないが, たしかにそれを示唆すると読める一節がある。すなわち, 『リカード全集』全10巻の編集, ならびにいくつかの編者注や序文 (第I巻序文を含む) の執筆を, スラッファと「共同で collaborating」行った, とある (p.119)。ドップ自身が“(including the Introduction to vol.I)”とカッコ書きでわざわざ注記して強調していることは, サムエルソンの解釈の有力な状況証拠になるだろう。筆者としては, 以下で「編者スラッファ」という場合, 実はドップであるかもしれないとの留保を置きたい。

みはずされたにちがないと思います」(マルサスよりリカード宛1816年4月28日付, Ricardo, VII, p.30)。明らかに, マルサスの訪問中に, リカードは新たに採用した労働価値説について知らせたのである。

比較優位の原理の発見 (1816年9月下旬~10月初旬)

続く数ヶ月リカードは著書の仕事をほとんど進めていないので(「私の労働はこの2ヶ月ほどまったく休止しています」マルサス宛1816年5月28日付, Ricardo, VII, p.36), 比較優位の発見は1816年の7月から10月の間に絞られる。1816年10月には, リカードは『原理』の最初の7章をジェームズ・ミルに送っている。同年11月18日, ジェームズ・ミルはリカード宛に次のように書き送っている。「外国貿易にかんする研究は, その他のものと同じく, 独創的で, 確固としており, またみごとに論証されています。外国貿易は一国民の財産の価値を増すわけではないという点, 同じ種類の商品を自国で生産するよりも外国で生産する方がいっそう多く要費するのにそれらの諸商品を外国から輸入することが自国にとって有利な場合があるという点, 一国内での製造技術の変化が貴金属の新たな配分を生み出すという点, これらは最高の重要性をもつ新しい命題であります, あなたはそれを完全に証明しておいでです」(Ricardo, VII, p.99)¹³⁾。

ラフィンの結論は「リカードが比較優位を発見したのが1816年9月下旬か10月のはじめの数週間である」(Ruffin 2002, p.737) というものである。その証拠となるのが, 1816年10月5日付のマルサス宛書簡, および1816年10月14日付ジェームズ・ミル宛書簡である。

1816年10月5日付のマルサス宛書簡で, リカードは自らの見解を公表できる見込みがほとんどないとの懸念を表明し, その理由をこう説明している。「昨今私は価格と価値の問題に足を奪われています。というのは, これらの諸点にかんする私の以前の考えは正確ではありませんでしたので。私の現在の見解も, 以前の意見のすべてと矛盾する諸結論に導くところを見ますと,

13) この手紙を見れば, ジェームズ・ミルがリカードに比較優位の原理を教えたとするスエットの説が誤りであることは明白であろう (Thweatt 1976)。

同様に間違っているのかもしれませんが」(マルサス宛1816年10月5日付, Ricardo, VII, pp.71-2)。編者スラッファは、ここに次の脚注を付している。「彼の『現在の見解』というのは、たぶん、『賃金の上昇と物価の下落との両立性』にかかわるものであろう(本全集第1巻 p.63)。本巻 p.82の『奇妙な効果』を参照」(Ricardo, VII, p.72n, また、第I巻編者序文にも同様の記述がある。Ricardo, I, pp.xv-xviを参照)。

1816年10月14日付ミル宛書簡でリカードは比較優位をちょうどいま発見したところだと告げるに等しいことを述べている。リカードははじめに原稿が出来ないことを述べ、次に「リカード効果」について触れる¹⁴⁾。続くパラグラフで、筆写の仕事のために誰か人を雇うべきだというミルの申し出を、たえず修正を行っているからという理由で断る。その次のパラグラフが決定的に重要である。

「私は価格の法則 (the law of price) を見出すためにけたはずれに頭を悩ませて (beyond measure puzzled) きました。私は数字に相談してみて私の以前の見解が正しいはずがないことを発見し、私の困難を解決する仕方がわかるまでにたっぷり2週間もそれについて考え抜きました。その間は先へ進むことができませんでした。そうでなければ私の仕事はもっとはかどって

14) 「あなたは賃金の上昇が、主として機械および固定資本の助けによって獲得される諸商品の価格にもたらす奇妙な効果をご覧ください。……この困難な点について熟考なさったご意見をお聞かせください。貨幣の種々の利率を想定したうえで、年金の現在価値が将来のどんな年数についても計算されている表があります」(Ricardo, VII, pp.82-3)。なお、この「リカード効果」についてシュムペーターは、『原理』第1章第5節から引用しつつ、次のように説明している。「たとえば、もし賃金が騰貴するならば、その生産に『固定資本』もしくは高度の耐久性ある『固定資本』がおおいに入りこむような商品の相対価値は下落するし、また『価値 [価格] を評価する媒介物よりも、より少ない固定資本、あるいは耐久性のより少ない固定資本をもちいて、主として労働によって生産される商品』[Ricardo I, p.43] の相対価値は、上昇するに至る」(Schumpeter 1954, p.595, 邦訳第4分冊 1251ページ)。新古典派経済学の視点に立てば、この「リカード効果」は「ストルパー＝サムエルソン効果」の未熟な形態である。他方、ラフィンによれば、1816年10月11日付マルサス宛書簡でリカードが考察していたのは「要素価格均等化」の問題であった (Ruffin 2002, p.739)。2つの関連する論点をリカードが同時期に考察していたのだとすれば興味深い。

いたはずで。私はこれから課税の問題を、理論の一貫した展開になるように、まず手はじめに紙のうえで考えてみましょう」(Ricardo, VII, p.84)。

编者スラッフア [ドップ?] の誤り

ラフィンの推理によれば、リカードが念頭においていたのは外国貿易であって、スラッフアが主張した「リカード効果」ではなかった。理由は以下の4つである (Ruffin 2002, p.738)。

①「リカード効果」はたんに「奇妙な効果」であるにすぎず、計数感覚に優れたリカードにとって「頭を悩ませる」ほどのものではなかった。

②10月14日付書簡で、「頭を悩ませられた」とする議論は、「リカード効果」への言及の直後に続くものではなかった。

③「奇妙な効果」は価格法則に影響を与えないが、比較優位の原理はリカードにとって労働価値説の急所を突くものであったにちがいない。国内通商において、2財の交易は労働費用にしたがって行われるが、国際貿易において、交易される財が異なった労働量を含むことがありうる。この現象がリカードが書簡のなかで述べた「価格の法則」だということは明らかであろう。リカードの「以前の意見」とは、価値がつねに相対的な労働費用によって規定されるというものであろう。

④上記引用文の最後の一文で、「私はこれから課税の問題を考えてみましょう」と述べているのは、リカードが「外国貿易について」に続く第8章にとりかかる準備ができたということを示している。リカードが『原理』を章の順序通りに執筆したとすれば (その可能性が高い)、それまでは比較優位について考えていたということになる。

リカードはなぜ思考を節約したのか?

ラフィンによるリカード書簡の分析を以上で詳細に追跡した。ラフィンの分析は十分説得的であり、われわれは彼の結論を全面的に受け入れてよいと考えられる。同時に、ラフィンの分析から、彼が意図した以上の内容¹⁵⁾が浮き彫りになることに気づくであろう。

ラフィンによれば、リカードは1816年3月頃、労働価値説を採用した。リ

カードは外国貿易の考察にさしかかった10月前半にかけての約2週間、国内通商においては2財の交易は労働費用にしたがって行われるが、国際貿易においては交易される財が異なった労働量を含むことがありうるという問題をめぐって、「けたはずれに頭を悩ませた」のである。したがって、『原理』第7章の「比較生産費説」の部分貫く主軸の論理はあくまでこの問題の解決なのであり、他の要素は系論ということになる。

リカードはつぎの有名な章句でもって「比較生産費説」についての議論を始めた。「一国における諸商品の相対価値を規定するのと同じ規則が、2つあるいはそれ以上の国々の間で交換される諸商品の相対価値を規定するわけではない」(Ricardo, I, p.133)。この一文を受けて、原文 [2] では「ポルトガルがイングランドのクロスと交換に与えるワインの数量は、各々の生産に充てられる労働量によって決定されるものではない。もし両商品がともにイングランドまたはポルトガルで製造されたなら、それぞれの労働量によって決定されるのであるが」と問いをあらためて開いている。議論を展開したのち、原文 [5] で生産要素の国際不移動という解決を提示し、原文 [6] の長い注で「比較優位の原理」を俯瞰して締めくくっているのである。

ヴァイナーによれば (Viner 1937, pp.440-1), リカードの貿易利益にかんする議論はほとんど「18世紀ルール」の域を出ない、しかしながら、リカードが「18世紀ルールに付け加えた唯一のもの the sole addition」は、たとえばある商品を海外に比べて自国でより少ない絶対生産費で生産しうる場合でさえも、その商品を輸入することが有利なことがありうるとする思考である、とされる。ヴァイナーがこのように論じたとき、たしかに彼は問題の核心に触れていた。リカードが労働価値説との関連で「けたはずれに頭を悩ませた」のはこの「唯一の付加点」をめぐってであった。

15) 「比較優位の原理」の発見者はリカードではない、リカードは「比較優位の原理」を重視しておらず、また『原理』以後リカードがこれを再論することもなかった、とする議論 (Thweatt 1976等) にたいして、反証を提示することがラフィンの議論の主眼である。

他方、「貿易パターンの決定」「交易条件の決定」「貿易利益の論証」といった、今日の貿易理論の中心論点は、いずれもリカードにとって系論にすぎなかった。それゆえに、交易条件は、イングランドとポルトガルの間の貿易において伝統的に確立していた現実の交換比率をそのまま所与とするだけで通り過ぎた。「貿易パターンの決定」と「貿易利益の論証」については「18世紀ルール」の推論形式をそのまま採用し、マネッスを驚嘆させるような簡明さで「思考の節約」をやったのけたのである。われわれはリカードによる「思考の節約」に幻惑されてはならない。そうではなく、リカードにとって重要論点でないという理由で「思考の節約」が行われたにすぎないことに留意すべきなのである。

浮上するリカード貿易論の全体像

それでは、ヴァイナーのいう「唯一の付加点」をリカードが追加し、しかもそれについて2週間も「けたはずれに頭を悩ませた」のはなぜか？¹⁶⁾ヴァイナーであれば、この現象はたんに、貿易を行なう2国間の「二重生産要素交易条件 the double factorial terms of trade」は通常1に等しくならない、とでも表現すればすむ問題であろう (Viner 1937, pp.561-2)¹⁷⁾。しかしリカードの論理に忠実にこの問題を考えようとするれば、ここでわれわれは「比較生産費説」ないし「比較優位の原理」の狭い領域を越えて、リカード貿易理論全体の「原型理解」とは何かを追究しなければならなくなる。

『原理』第7章は、次の3つの部分から成る。

①利潤論、②これまで論じてきたいわゆる「比較生産費説」を提示した部

16) ラフィンによれば (Ruffin 2002, pp.739-40), リカードはこの2週間、途方もない集中力でもって問題に取り組んだ。1816年10月11日付のマルサス宛書簡によれば、リカードはこの間、曜日を忘れてしまうほどであった (Ricardo, VII, p.78)。14年間におよぶ公刊された彼の書簡のなかで「曜日を忘れた」とリカードがこぼしたのはこのときだけだった。たしかに曜日を忘れるとは、リカードの一流のビジネス・キャリアからいっても、よほどのことだったのであろう。

17) 言い換えれば、「A国の1単位の生産要素で作った輸出品で、何単位のB国の生産要素で作ったB国の輸出品が購買できるか」(小島 1956, 75ページ)、これが通常1にはならない。

分、③貨幣を導入した議論 (“specie flow mechanism”)。第7章でリカードが主張しようとした論点は①である¹⁸⁾。穀物法廃止による安価な穀物輸入によって利潤率を上昇させ、もって定常状態の到来を遅らせるべきだ、とする議論は、第7章ばかりでなく『原理』全体、あるいは『原理』以前からのリカードの最重要の主張であった。これはほとんどリカードの「強迫観念 *obsession*」とでも呼ぶべきものであったと言ってよい (Maneschi 1992, p. 429)¹⁹⁾。

「結局のところ、リカードにとって自由貿易とは、食糧を供給する農業国にたいして先進工業国が採るのに適した政策を意味した。『原理』の外国貿易にかんする章の主眼は、貿易利益の説明ではなく、外国貿易が利潤率に影響を及ぼすのはより安価な賃金財輸入を通じる場合に限られるという点の証明におかれていた」 (Blaug 1987, p.440)。

1815年の『利潤論』では、2つの「貿易利益」について述べられている。

「一国が貿易によって利益を受ける方法は2つある——そのひとつは一般的利潤率の増大によるものである。これは私の意見によれば、食糧低廉の結果としてだけ起こりうるものであって、この食糧低廉ということは農業者、製造業者、商人あるいはその貨幣を利子貸しする資本家のいずれであるかを問わず、その資本の使用から収入をあげる人たちにとってだけ有利なのである——他方は諸商品が豊富であるということ、すなわちその交換価値の低下

18) 「[第7章は] (1) 『外国貿易による価値額不変、したがって利潤率不変』命題、(2) 比較生産費説、(3) specie flow mechanism の3つの部分から成っている……結論を先取りすれば、リカードウ外国貿易論の核心は、外国貿易による価値額不変を主張した冒頭の一節に集約されている。外国貿易論は利潤論の一環として書かれている。利潤率は賃金の低下による以外は上昇せず、賃金の低下は生活必需品の価値低下による以外は起こらない、これがリカードウ経済学の基本命題である」 (鳴瀬1981, 279-80ページ)。

19) この表現を用いたのは次の2つの理由による。①当時、穀物法廃止を(政治的にでなく)学問的に強硬に主張した論者は、ほぼリカードだけだったこと (Hilton 1987, p. 670)。②安価な穀物輸入によって利潤率を上昇させる、という議論は、生活必需品(賃金財) 価格の低下のみが賃金低下=利潤率上昇をもたらすという理論に基づいているが、これはマルクス経済学によれば「V+Mのドグマ」にあたり、妥当でないこと。

によるものであって、それには全社会が恩恵にあずかっている。第一の場合には、その国の収入は増大させられる——第二の場合には、同一額の収入が効率的となって、より多くの生活必需品ならびに奢侈品が獲得されることになる」(Ricardo, IV, p.25)。

この両者が複合された結果が『原理』第7章であった。

しかし、1816年3月以降の労働価値説確立を経て、1816年10月時点で第7章の執筆に向かったとき、リカードにとって問題だったのは、次の点である。すなわち、収穫逓減が作用するにしても、当時のイングランドは世界最高の農業生産性をすでに達成していたはずである。労働価値説確立以前には、穀物法廃止がただちに安価な穀物輸入に道を開くとの持論を何ら矛盾を感じずに展開しえた。ところが、労働価値説を確立したうえで、しかもイングランドの農業が世界最高の絶対的生産力を誇りつつも安価な穀物輸入が可能であると主張することは理論的難問であった。

これが、リカードを2週間悩ませた「唯一の付加点」の内容であり、「比較生産費説」ないし「比較優位の原理」の発見によって克服された問題なのである。

それでも問題はまだ解消しない。たしかに現代のテキストブックのように貿易を純粹の物々交換と考えれば、貿易収支は定義上つねに均衡すると考えられる²⁰⁾。しかし地金論争を経験したリカードがそのような非現実的解決に満足できるはずもない。むしろリカードは貨幣的自動調節メカニズムを、絶対的生産力格差を中和し、生産条件変化を経験しても貨幣価値の波動を通じて均衡を回復する装置として把握することを選択した²¹⁾。したがって、“spe-

20) 実際、J・S・ミルはその方向に道を開いた。「すべて貿易というものは、実際においては物々交換であって、貨幣はもろもろの物品を互いに交換するためのたんなる道具にすぎないものであるから、私たちは、簡単にするために、国際貿易は、その形態において、現実につねにそうなのだが、一商品の他の商品にたいする実際の現物交換であると仮定しよう」(J.S.Mill 1848, p.583, 邦訳第3分冊278ページ)。さらに、マーシャルの時代にいたって、貿易は文字通り「純粹」貿易理論、すなわち物々貿易として考察されるに至った (Marshall 1923)。

“specie flow mechanism”とは「比較生産費説」のたんなる補完物ではなくて、リカード貿易論の不可欠の一要素なのである。換言すれば、「比較生産費説」は、たとえ一時的にでも貨幣的自動調整メカニズムから切り離して把握できる別個の理論なのではない。結局のところ、ラフィンの分析によって鮮明に浮かび上がるのは、リカード貿易論が利潤論ならびに貨幣的自動調整メカニズムと不可分一体の構築物であって、つねに「三位一体」のものとして捉えられるべきだとする全体像なのである。

IV むすびにかえて

本稿では、行澤健三の「比較生産費説」にかんする「原型理解」、およびラフィンによる新解釈をとりあげ、結局のところ、そこからリカード貿易論の全体像の把握に進まざるを得ないということを論じた。リカードにおける「比較優位の原理」は、利潤論ならびに貨幣的自動調整メカニズムと、良かれ悪しかれ不可分一体のものである。この理解は、とりわけ貨幣的自動調整メカニズムが作動しなければ「比較優位の原理」そのものが妥当性を失うというケインズ＝マルクスの批判（田淵2001参照）に道を開くものである。

「比較生産費説の両端」の問題、ミル父子以降の「変型」プロセスの問題、イングランドとポルトガル間の貿易関係の実態についての解明が今後に残された課題である。これらについては稿を改めて論じたい。

21) “specie flow mechanism”の具体的作動については、鳴瀬（1981）を参照せよ。また次の一文を参照。「[相対価格差による貿易の]制約になる生産力の絶対的格差を中立化するものが貨幣数量である。絶対的生産力の高い国には大量に金が流入して、その国の国際競争力を減殺し、生産力の低い国からは金が流出して、その国の競争力を増進するというように、貨幣数量が生産力の絶対的格差を中立化するからである」（本山1984, 66-7ページ）。

参考文献

- 馬場宏二 (2003a), 『『資本論』の一文献』, 『マルクス経済学の生き方 ——批判と好奇心 ——』御茶の水書房, 所収。
- (2003b), 「ヘンリー・マーチンの経済学——補説『『資本論』の一文献』——」, 大東文化大学経済研究所 *Working Paper*, No.23, 5月。
- Blaug, Mark (1987), “Classical Economics”, in J.Eatwell, M.Milgate and P.Newman eds., *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, Vol.I, London: Macmillan.
- Chipman, J.S. (1965), “A Survey of the Theory of International Trade Part 1: The Classical Theory”, *Econometrica*, Vol.33, No. 3, July.
- Dobb, Maurice (1978), “Random Biographical Notes”, *Cambridge Journal of Economics*, Vol.2.
- Hilton, B. (1987), “Corn Laws”, in J.Eatwell, M.Milgate and P.Newman eds., *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, Vol.I, London: Macmillan.
- 木下悦二 (1967), 『資本主義と外国貿易』, 有斐閣。
- 小島清 (1956), 『交易条件』, 勁草書房。
- Maneschi, Andrea (1992), “Ricardo’s International Trade Theory: Beyond the Comparative Cost Example”, *Cambridge Journal of Economics*, Vol.16, No. 4, pp.421-37.
- (1998), *Comparative Advantage in International Trade: A Historical Perspective*, Cheltenham: Edward Elgar.
- (2003), “The True Meaning of David Ricardo’s Four Magic Numbers”,
<http://www.vanderbilt.edu/Econ/courses/ricardos4numbers.pdf>.
- Marshall, Alfred (1923), *Money, Credit and Commerce*, London: Macmillan.
- Martyn, Henry (1701), *Considerations [up] on the East India Trade*, reprinted in J.R.McCulloch ed., *Early English Tracts on Commerce*, first published in London, 1856, reprinted in 1954, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mill, James (1844), *Elements of Political Economy, 3rd Edition*, Rondon: Henry G.Bohn, reprinted by New York: Augustus M.Kelley, 1965.
- Mill, John Stuart (1844), *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*, London: John W. Parker. (杉原四郎・山下重一編『J・S・ミル初期著作集4 ——1840~1844年

- 』御茶の水書房，1997年，所収)
- (1848), *Principles of Political Economy*, London: John W. Parker, reprinted by New York: Augustus M. Kelley, 1961. (ジョン・スチュアート・ミル著，末永茂喜訳『経済学原理 (1)～(5)』岩波文庫)
- 本山美彦 (1982), 『貿易論序説』有斐閣。
- (1984), 「不等価交換論と国際価値論」, 根岸隆・山口重克編『二つの経済学——対立から対話へ——』東京大学出版会，所収。
- 森田桐郎 (1977), 「古典派国際分業論再考」『経済学論集』(東京大学) 第43巻第3号，森田編著 (1988) 所収。
- 編著 (1988), 『国際貿易の古典理論——リカードウ経済学・貿易理論入門——』, 同文館。
- 鳴瀬成洋 (1981), 「国際経済における均衡——リカードウの問題提起とその解答——」『経済論究』第51号，森田 (1988) 所収。
- Ricardo, David (1951-73), *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11vols, edited by Piero Sraffa with the collaboration of M.H.Dobb, Cambridge: Cambridge University Press. (D・リカードウ著，P・スラフファ編，M・ドップ協力，堀経夫他訳『デイヴィド・リカードウ全集 I～XI』雄松堂書店，1969-99年)
- Ruffin, Roy J. (2002), “David Ricardo’s Discovery of Comparative Advantage”, *History of Political Economy*, Vol.34, No. 4, Winter 2002, pp.727-48.
- Samuelson, Paul A. (1969), “The Way of an Economist”, in Paul A. Samuelson ed., *International Economic Relations*, London: Macmillan, reprinted in Robert C. Merton ed., *The Collected Scientific Papers of Paul A. Samuelson, Vol.III*, Cambridge: The MIT Press, 1972. (塩野谷祐一他訳『サムエルソン経済学大系 第9巻 リカード，マルクス，ケインズ……』勁草書房，1979年)
- Schumpeter, J.A. (1954), *History of Economic Analysis*, London: Allen & Urwin. (J・シュムペーター著，東畑精一訳『経済分析の歴史 1～7』岩波書店，1958年)
- Sraffa, Piero (1930), “An Alleged Correction of Ricardo”, *Quarterly Journal of Economics*, Vol.44, pp.539-45.

田淵太一 (2001), 「『特殊ケース』としてのリカード・モデル」, 『山口経済学雑誌』第49巻第6号。

Thweatt, W. (1976), “James Mill and the Early Development of Comparative Advantage”, *History of Political Economy*, Vol.8, pp.207-34.

Viner, Jacob (1937), *Studies in the Theory of International Trade*, reprinted in 1955, London: George Allen & Unwin.

行澤健三 (1974) 「リカードウ『比較生産費説』の原型理解と変型理解」『商学論纂』(中央大学)第15巻第6号, 森田編著(1988)所収。

—— (1976), 『労働生産性の国際比較——日米工業を中心として——』, 創文社。

—— (1978), 「古典派貿易理論の形成——リカードウとミル父子——」, 行澤健三・平井俊彦・出口勇蔵編, 出口勇蔵古希記念論文集『社会科学の方法と歴史』ミネルヴァ書房, 所収。